

## 2021 年度 入学試験問題

# 国 語

## (第 3 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ここで、働き方に対する価値観の変化を探るために、まず消費性向の変容に目を向けてみましょう。資本主義社会の原動力は「欲求」から生まれる消費にありますが、時代ごとにその特質は大きく変わってきました。

※ポスト消費社会が叫ばれた1980年代、日本の消費性向は高度成長期に形成された同一的・物質的なものから、差別的・記号的な消費性向へと転換していきました。東京を中心にサブカルチャーが文化となつて、商品をはじめライフスタイルもコピーによってかたちづき、彩られ、華やかさをみせ、ライフスタイルや生きざままでもが、わかりやすく記号化されていった時代です。東京が社会の価値観をリードし、中流意識をまとう世間はそこに身を置くことに、<sup>a</sup>ヨウキな楽しさ、<sup>あんどかん</sup>安堵感を抱いたようにみえます。

そうしたなか、<sup>※</sup>バブル熱が高まると、モノから土地、建物、株式など、資産で資産を購入していく倍々ゲームの消費が過熱化していきました。一種のゆがんだ消費性向が、实体经济と金融経済の乖離をもたらしていきます。これは、経済を**モはやカシ**化できるものだけでは捉えられない時代になったことを意味します。そして、昭和の時代が終わり、その後しばらくしてバブルははじけました。

2000年に入ったあたりから、インターネットが経済・流通システムに溶け込んだことよつて消費スタイルは大きく変わりました。他方、経済は<sup>※</sup>デフレとあいまつて、衣料や食料品など低価格品が普及しました。かつてのように、人よりワンランク上のものをとといった上昇志向は<sup>a</sup>画一的な大型ショッピングモールが地方でも都市部でも次々にできていきます。

また、所有の概念が大きく変わりましたが、それを象徴しているのが住宅です。家族を持てば、賃貸アパートからスタートし、子供が生まれる頃には郊外一戸建てをローンで購入といった「住宅スゴロク」はもはや一般認識ではなくなりました。減少傾向にあった賃貸物件は2012年に増加に転じましたが、これは、家族の生活スタイルにあわせて、そのつどに移り住む

図表 1 日本社会の変化

	高度成長期	安定成長期	失われた 20 年	現在
消費性向	同一的消費性向 物質的豊かさ	<b>B</b> 消費性向	コンテンツ消費性向	ソーシャル的消費性向 人とのつながり 「ファスト志向」と「ホンモノ志向」
社会意識	中流化	1 億総中流	格差社会、孤独	ポスト 1 億総中流 「匿名性」と「顔の見える関係」
雇用・働き方	サラリーマン化	安定雇用	非正規化	ワーク・ライフ・バランス

図表2 現在の働き方/やってみたいと思う働き方

【設問】

- (1) あなたは、現在どのような働き方をしていますか。あてはまるものをすべてお知らせください。  
 (2) あなたが、現在やっている、やっていないにかかわらず、いずれ自分でやってみたいと思う働き方をすべてお知らせください。(複数回答)

現在の働き方(18~29歳)

会社や職場から与えられた目標を堅実にこなすために働く	21.1 (%)
年収はそこそこだが、自分が生まれ育った地元や地方で働く	15.0
雇用が安定していて、残業や転勤もある正社員として働く	13.0
定型業務や補佐的な業務を行う、一般職として働く	12.6
終身雇用で定年まで同じ会社で働く	11.2

やってみたいと思う働き方(18~29歳)

	(現在している)	(やってみたい-現在している)	(%)
会社に所属しながら、在宅勤務など、自宅で仕事をする	19.7	3.1	16.6 (%)
働き手の事情に応じて、勤務時間を選べる環境で働く	16.4	7.9	8.5
信頼できる仲間と、小規模なビジネスや仕事をする	14.7	3.6	11.1
知名度は高くないが、ユニークな技術やサービスを持つ企業で働く	14.5	4.2	10.3
年収はそこそこだが、自分が生まれ育った地元や地方で働く	14.1	15.0	-0.9

注：週3日以上勤務の就労者、男女18~49歳5400人のうち、18~29歳3000人のデータ。2015年3月実施。

出所：電通総研「『若者×働く』調査」

X

頼(たの)みできる仲間と、小規模なビジネスや仕事をする」(14.7%)、「知名度は高くないが、ユニークな技術やサービスを持つ企業で働く」(14.5%)、「年収はそこそこだが、自分が生まれ育った地元や地方で働く」(14.1%)が上位に挙げられています。

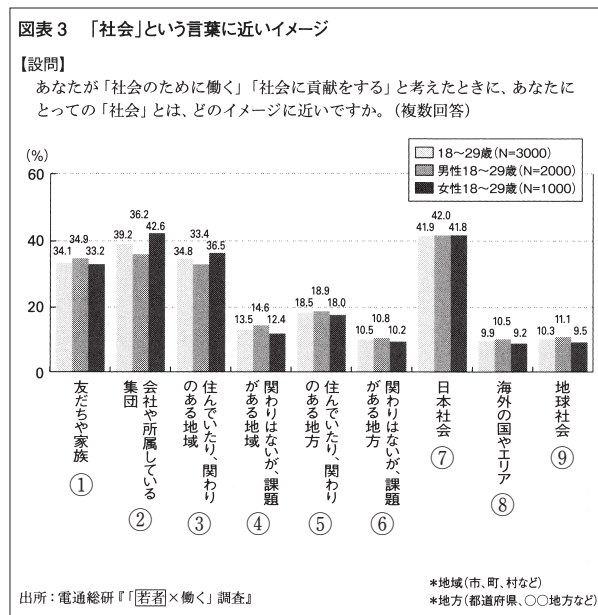
というライフスタイルの選択肢(せんたくし)が柔軟(じゅうなん)になったことを表しています。クルマもシェアする時代になり、消費や所有のかたちは以前より多様化し、モノへの執着(しつちやく)心や欲求(うきせう)は薄(うす)れてきているようにみえます。<sup>\*</sup> マーケティングの世界でもよくいわれることですが、消費のかたちは、モノからコト、関係性へと大きく変化してきています。

つまり、現在のわたしたちは、ファスト志向の広がりのおかげで、ホンモノ志向も強め、レンタルやシェアといった所有の新たな形態が普及し、人との差別化よりも、多くの選択肢のなかから、そのつどに選択して、サイテキなもの(そまてきなもの)をミックスさせているわけです。ソーシャルネットワークなどファッション的(そまぶつてき)で即物的(そくぶつてき)なつながりを持ちつつも、リアルなつながりも求めたい、人とのつながり方にもファスト志向とホンモノ志向の二重性(にじゆうせい)が存在(そんざい)しているようにみえます。双方(そうほう)に社会(しゃかい)が二極化(にきくか)するのではなく、<sup>①</sup> 一個人(ひとりご)のなかに双方(そうほう)が存在(そんざい)しているのが現在の消費性向(しょうめいせいこう)の特徴といえます。

こうした消費社会(しょうめいしゃかい)における価値観(かちかん)の変化は、現代(げんたい)の若者(わかしよ)の働き方に反映(はんえい)されている面(めん)も少なくありません。

若者(わかしよ)の働き方(かまかた)に関して、2015年3月に電通(でんつう)が18~29歳(さい)の就労者(しゅうらうしゃ)3000人を対象(たいしょう)に実施(じっし)したアンケート調査(きんさ)から見(み)てみましょう(図表2・3)。回答者(こたへいしや)の雇用形態(こようけい)は、正社員(せいしゃいん)が63.6%、非正規雇用(ひせいぎこよう)が32.1%、フリーランス(ふりーらん)や自営業主(じぎやうしゅ)が4.1%となっています。調査結果(きんさけつ)からは、現実(げんじつ)としての安定志向(あんていしゆう)とともに、理想(りゆうきやう)としての生きがい志向(いきがいきしゆう)がみてとれます。

興味(きょうみ)深い(ふかい)のが、現実(げんじつ)の働き方(かまかた)と理想(りゆうきやう)の働き方(かまかた)を比較(ひかく)した設問(けつもん)に対する回答(こたへい)です。図表2にあるように、現在の働き方(かまかた)は「会社(かいしゃ)や職場(しょくば)から与(あた)えられた目標(きョくひやく)を堅実(けんじつ)にこなすために働く」(21.1%)が上位(じょうい)にきていますが、「やってみたいと思う働き方(かまかた)」は「会社(かいしゃ)に所属(そくじゆ)しながら、在宅(ざい)勤務(こむ)など、在宅(ざい)勤務(こむ)を」(19.7%)、「働き手(かまかた)の事情(じじょう)に応じて、勤務時間(こむじかん)を選(えら)べる環境(かんきやう)で働く」(16.4%)、「信頼(しんらい)できる仲間(なかま)と、小規模(せうぎぼ)なビジネス(びじねす)や仕事(しごと)をする」(14.7%)、「知名度(ちゆうめいど)は高(たか)くないが、ユニーク(ゆにいく)な技術(ぎじゆつ)やサービス(サービス)を持つ企業(きぎやう)で働く」(14.5%)、「年収(ねんしゆ)はそこそこだが、自分が生まれ育(は)った地元(じよん)や地方(ちほう)で働く」(14.1%)が上位(じょうい)に挙げられています。



でも少なくなっており、地域といっても、漠然とした場ではなく、具体的に人の顔が見える範囲がイメージされていることが読み取れます。

つまり、若者は柔軟な働き方をしつつも、自分の能力を高める仕事を理想としている層が一定の割合いること、彼らが考える「社会」のイメージは主体的で、会社や家族だけでなく、身近な地域社会も視野に入っていることがわかります。

さらに調査では、「1つの会社でずっと働いていたい」とした割合は2割弱にすぎず、チャンスがあれば転職したり、経験を積んでフリーランスとして働いたり、できれば働きたくないと希望する層も含め、依存しない働き方を志向する者が多数を占めていることも特徴です。また「モータリティ社員」という言葉を知っているのが2割程度という結果が出ており、社会の変化とともに若者の労働観も変容していることを表しています。

経済・労働を取り巻く環境について、日本ではワーク・ライフ・バランスの議論が先行していますが、注目したいのは、仕事の種類そのものが多様化してきていることです。たとえば、アメリカでは新たな社会階層として「クリエイティブ・クラス」の台頭に注目が集まっています。

「クリエイティブ・クラス」というと、新たな発明や新商品の開発を担う人びとを思い浮かべがちですが、より広く、新しい発想で、新しい概念や作品、技術を創り上げる人のことを指します。究極的には、iPadやiPhoneを生み出したアップルのスティーブ・ジョブズのような人がイメージされるかもしれませんが、しかし、この言葉にはもっと広い意味が含まれ、工場にも美容院にも、あらゆる職場、職業にクリエイティブティビティは見出され、仕事と遊びをはっきり分けない柔軟な働き方、豊かなライフスタイルを実践している人たちが想定されています。また、地域性に注目すると、アメリカでは都市に集中するとされていますが、日本では逆に都市というよりは、むしろ地方や農山村での活動が目を見えます。

IT系・映像系の仕事を中心に、クリエイティブ産業に従事する人材が引き寄せられるように集まってきているのが、徳島県神山町です。街の人口は約6000人、1955年には

また、「社会のために働く」「社会に貢献する」と考えたとき、イメージする「社会」はどのイメージに近いか、という設問では、

Y

2万1000人ほどの人口を抱えていましたが、かつては人口流出が続いたテンケイ的な過疎のまちでした。しかし、新たなライフスタイル、働き方を求めて、30歳前後を中心として定住者が増え、2011年には初めて社会増となりました。

人口減少、過疎の現状を受け入れ、多様な働き方が可能な場を発信してきたのが、NPO法人グリーンバレーです。2015年現在、グリーンバレーが仲介し、ITベンチャーなど12社がサテライトオフィスをまちに設置したり、新会社を設立したりするなど新たな動きが起こっています。

(中略)

こうした若者を引きつける環境を、NPO法人グリーンバレーが徐々に整えてきました。理事長の大南信也氏は「人が人を呼んでいる。そこに何があるかではなく、そこにどんな人が集まるか、それが面白い」と語ります。グリーンバレーそのものも、活動を柔軟に変えながらできあがってきたかたちです。当初は芸術分野を専門としており、ワーク・イン・レジデンスで海外のアーティストを呼んで滞在してもらい、活動を支援するところから始まりました。それが移住者支援を続けていくなかで、企業支援、古民家再生、次第に芸術系からIT系や映像系の起業家や人材へとシフトしてきました。

そして現在では、商店街の空き店舗再生にもつながっています。自分たちがほしい店舗や人を誘致したり、またそれを担う人材を塾形式で育成したりするなど、活動の幅を広げています。有機農業やビストロ経営にチャレンジする人も出てきました。IT系の人びとだけではなく、ビストロやカフェ、オーダーメイドの靴屋が商店街の空き店舗に入居し、懐かしい景観を残しつつも新たな生活空間を再構築し、神山ならではの場のアイデンティティを築き上げています。地域での暮らしが完結する仕組みをひとつずつ組み立てながら、地域内経済循環が志向されているのです。

当初からIT系の企業を誘致するというスタイルだったのではなく、<sup>②</sup>人が人を呼ぶ循環のなかで行きついた現在のかたち。創造性をキーワードとしながら、一方では伝統や住民の知恵を重んじる——神山の一連のこうした取り組みを、大南氏は「創造的過疎」と呼んでいます。都市とは異なる自然豊かな伝統的な地域空間で、クリエイティブ産業や生活領域で多様な人材が集まる。特殊な地域といえますが、魅力的なのは場所ではなく、受け入れる人、集まる人も含め、彼ら彼女らのつながりから生まれる相互の柔らかな関係です。そして、事業の転がり、どこに向かつていくかわからない事業の方向性を楽しむ余裕があることも神山町の特徴と言えるでしょう。

これまでの常識を超える形でフラットな関係が地域で生み出され、それがひとつの産業となつて経済循環を生んでいくプロセスを、神山町の経験は教えてくれます。そこに何があるか、ないかではなく、そこにどんな人がひきつけられるかが意味を持つてきています。

(松永桂子『ローカル志向の時代 働き方、産業、経済を考えるヒント』より)



※性向……人の性質の傾向。

※ポスト消費社会……「消費社会」の次の社会のこと。

※バブル……1980年代後半から1990年代初頭にかけて起こった資産価値の上昇と好景気。

※乖離……結びつきがはなれること。

※デフレ……私たちが普段買っている日用品やサービスの値段（物価）が全体的に下がる現象。

※マーケティング……消費者が求めていることを分析し、販売戦略を立てること。

※シフト……状態や体制などを移行すること。

問1 ——線 a～d を漢字に直しなさい。

問2 空らん A にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 うずをまき
- 2 せきをきり
- 3 なりをひそめ
- 4 ひけをとり

問3 図表1の空らん B にあてはまることばを文中から七字でぬき出しなさい。

問4 ——線①「一個人のなかに双方が存在している」とありますが、その例としてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自宅でペットとして猫を飼いつつ、時々猫カフェにも足を運ぶ。
- 2 画集では絵の良さが分からないので、必ず美術館で鑑賞する。
- 3 VRで仮想旅行した場所が気に入ったので、実際にその場を訪れた。
- 4 有名ラーメン店の味が気に入ったので、同店監修のインスタントラーメンを買った。



問7 — 線②「人が人を呼ぶ循環」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 移住してきた人たちが活気のある地域づくりに貢献することにより、次の移住者が集まってくることをつてくること。
- 2 由緒正しい土地であることがメディアに特集されたことにより、次の移住者が集まってくることをつてくること。
- 3 有名な人物に依頼をした広報活動が世間に広まったことにより、次の移住者が集まってくることをつてくること。
- 4 地元の人間同士のつながりに頼った人材派遣のネットワークにより、次の移住者が集まってくることをつてくること。

問8 次に示す文は本文の内容をまとめたものです。空らんⅠⅡⅢにあてはまることばを、文中からⅠは三字、Ⅱは二字、Ⅲは三字でぬき出してそれぞれ答えなさい。

Ⅰの多様化により、現代の人々の消費性向や働き方に対する理想が変化した。まちづくりをする上でも今後はⅡな発想が求められ、Ⅲのある取り組みが必要になる。



(問題は次のページに続く)



2 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

中学生の雄太は夏休みにおじさんに連れられてある山に登った。そこではおじさんが働く大学の研究生が山の保全活動をしていた。雄太は自然とその活動を手伝うようになり、すぐに仲間と認められるようになっていた。次の場面はある夜、トイレに起きた雄太と、男子学生のユイが山小屋の外で会話をしている場面である。

「ぼくは、山にはまともになりにくるんだ」

「まとも？」

「下では理屈りくつやら、しぼりが多くてさ、窮屈きゆうくつになる。それを取っばらって、自分のほんとに大切に思っていることに会いにくる。食べて、歩きに歩いて、体を動かして、寝る。ただそれだけ。でも、それだけで、少しはまともになるかなって思ってたさ」

お、言いすぎたかなとつぶやきながらユイさんはまた雲のかかった空をふりあおいだ。「この山の修復だって、下ではいろいろんな理屈りくつが渦巻うずまいてる。<sup>①</sup>自然うぜんなんだからあるがままにそのままにしておけばいいっていう意見もある。そうだよな。人間が手を入れて、守るなんてこと、ある意味おこがましいことかもしれない」<sup>a</sup>

暗くてユイさんの表情が見えなかった。

「山が荒あれてるって思うのは人間だけ。山のほうは荒れてるなんて思ってやしないもんな。

下からいろんな理屈りくつを背負おって登のぼってきてこの景色を見るだろ？ もやもやしなながら目の前の景色を見ると、あっけなく感動しちゃう。下の理屈りくつなんて、どっかに吹き飛ひんじやう。そして、この景色をだれかに見てほしいと思う素直すなおな気持ちになった自分がある。ぼくは、その思いに正直ちかに動うきたいんだ」

山を守ることがぜつたいに正しいと思っていたぼくは少しむっとした。

※「ゆれ動く詩人のぼくは」

冗談じやうだんっぽくユイさんは言う。

「どんな意見もありだけど、その中で、山に登ったときの正直ちかな気持ちにしたがうっていうことも、またありなんだと思ってる。うろろうしてしまっただけで、たいしたことができなくてもな」

納得なっとくがいなくて、ユイさんにたずねた。

「でも、自然を守るってぜつたいに正しいことでしょ？」

ユイさんがおやつという空気を発した気がした。

「ぜつたいに正しい、か。難しいな。そんなのってあるのかな。ほかの意見が入りこめないっていうのは、とても危ない気がする。相対する意見があつて、当たり前だ。その中でもがいてくことで、考え自体が強くなっていくんじゃないかな。わかろうとしたり、疑うったりすることが大切なんじゃないかな」

「そうかもしれないけど」

② 釈然しやくぜんとしない。

ユイさんは雲のかかった空を見あげた。ユイさんとぼくのヘッドランプが夜空の雲を照らした。

「雄太には今星空が見えないけれど、ぼくには、あそこに天の川がかかっている、あの辺に北斗七星しちせうがある、ってこと、わかるんだ。見えないけれどあるんだよ、ってな」

<sup>b</sup> けむに巻かれたのだろうか。なんだか大事な話をしてくれているような気がするけれど、よくわからない。

※ 「カミナリを予知できるってこと、ここでは、命綱いのちづなのようにすぐありがたいことだ。でも、下ではどうだったのかな。想像だけど、雄太はそれを隠かくそうと必死になってなかったかって心配しちまう。雄太、物事って一つの面だけで見ちゃいけないんじゃないかな。隠かくしたくてしかたのないことが、ぼくらにとっては命綱のように大切なことだってこともあっただろ。ぜったいとか、一つのこと決めつけないほうがいいんじゃないかな」

ユイさんのヘッドランプの明かりがぼくのほうをむいた。

「今夜の星空みたいに、今は見えなくても、あるってことはある。雄太の心の中にも、今は見えなくても、まだ隠れてるものがあるんじゃないかな」

ユイさんがぼくをじっと見て言った。  
くしゃみが一つでた。

「冷えてきたから、そんなかつこうじゃ風邪かぜひくぞ。早く寝ろ」  
ジャンパーをはおっているユイさんが気づかってくれた。

「うん」  
③ ぼくはもう少しユイさんのそばにいたかった。

「雄太、こんなとこにいたんか」  
ヘッドランプの明かりがぼくの目をつきさした。小屋からできたのは、ホクさんだった。

「ちつともどつてこおへんから、どしたんやろって、心配したやんか」  
ホクさんは様子を見にきてくれたらしい。

「ごめんささい」  
「なんや、元気ないな。ユイになんか言われたんか？」

ぼくは、考えながらホクさんにたずねた。  
「ホクさん、自然を守るって、ぜったいに大切なことでしょ？」

「なんでや？」  
逆にホクさんにたずねられた。

「え、だって、当たり前なことなんじゃないの？」  
「そやから、なんで当たり前なんや？」

ぼくは言葉につまった。

「ユイと話してたんは、そのことかいな。また難しいことを」

ホクさんが苦笑いしながらユイさんを見た。小屋の戸が開いて、ヘッドランプの明かりの中、長老さんが姿をあらわした。

「みなさん、おそろいですね。星空の下、人生を語ってるのかい？ 寝たら起きないリーダーさんは除外したとしても、ぼくをのけ者にしてさ」

「星、でてないです」

ぼくはすぐに反応した。

「お、そうか。それでも、この雲の上には満天の星は広がっている。それは確かだ。で、なんの話？」

「自然を守るって、ぜったいに大切やろって、雄太が」

④ 長老さんがぼくを見る。笑みが顔に広がっていった。

「それはまた、大変な議論を吹っかけてきましたね、雄太少年は」

長老さんは、そばの大きな石の上に腰かけた。

ホクさんが語りだした。

「日本人はさ、太古の昔から自然と仲良しだったんだ。自然の恵みを受けて生きてきた。植物の実を採ったり、作物を育てたり、漁をしたりしてさ。長い間そうしてきたから、体の奥に自然と仲良くしようっていうDNAができてるんだよ。だから、自然を損なう行為を見ると、悲しくなったり、いきどおったりしてしまうわけよ」

※ ホクさんが関西弁じゃない。おまけに早口だ。

「このごろの日本人は自然を思い通りに支配してもいいって考えるようになってる。でもさ、原発事故や、大規模な自然災害や開発で自然が損なわれるのを目の当たりにして、このままじゃいけないと考えはじめた人たちもでてきた。自然の多様性が失われていくことは、人間の存在自体がやうくなるってことにつながるってな」

⑤ ぼくは口をぽかんと開いて聞いていた。ホクさんの話が頭を素通りしていく。

「おい、ホク、熱くなってるぞ。大丈夫か？」

長老さんが小さな石を、ホクさんの足元にころがした。

ホクさんが、あれつと、頭をかいた。

ユイさんのかすれ気味の声が続いた。

「動物の一員としてのヒトっていうより、すべてをこわしてしまえるヒトっていう存在になっちゃったんだよな。そのくせ、山に入ると、全く無力なのにさ。寒さをしのぐための体毛も生えていなければ、歩き続ける強靱な体力もなくなってきた。弱い存在なのは太古のヒトから変わってない。この山だつて、重機をもってすれば、あつという間に破壊できるけれど、決して元にもどすことはできない。なんか考え違いをしている気がしてしょうがない」

頭をかきむしっているユイさんの足元に、長老さんがまた石をころがした。

「おいおい、雄太を見てみるよ。きよとんとした顔してるぞ」

「けど、雄太かて、ぼくらのメンバーやんか。いろいろと知つといて損はないやろ。そのうえで考えればええんやから」

ぼくは口を半分開いて、みんなの顔を見まわした。

「なあ。雄太。気がついてるかな。この雪田草原のいたるところに、草がはげて土がむきだしになっている場所があるのをさ。痛々しいって思わないか？」

長老さんの言葉にぼくは強くうなずいた。

「雪や雨が原因のこともあるけど、ヒトの歩いた踏みあとで、草がはがれちゃって、泥だらけの地面が顔をだしてるんだ。それって、どんどん広がってしまうわけよ。自然が荒れてしまってるんだ」

長老さんがあごをなでながら話しはじめた。

「ぼくには、それが、草原がケガをしてるって思えてしかたがないんだよ。だから、手当をしてやりたいってさ。ヒメが必死で、包帯にあたるような草をさがしていて、ぼくたちは、木道や階段を作って、踏みあとが、言いかえればケガの範囲がこれ以上広がらないように処置してるんだって思ってる」

⑥ 長老さんの言葉がすとんと胸に落ちた。

「さすが長老やな。むだに長く生きとらん。雄太が納得した顔しとるやんか」

ワツハツハと長老さんが笑った。

「ぼくは、あんまり難しいこと考えると頭が痛くなるからな。ややこしいことは、リーダーや、ユイ、ホクにまかせることにしてる。逃げてるわけじゃないぞ。これでも、わがろうとは努力しているつもり。ぼくなりにだけどさ」

長老さんはぼくの足元に石をころがした。

「自分なりでいいんじゃないかな。雄太なりにさ。ここにいるのが楽しいのなら今はそれだけでもいい。人なんてどんどん変わっていくからな。もっと知りたかったら、本読んだり、人の話を聞いて、思いを深めていけばいい」

長老さんのヘッドランプの明かりがぼくのほうをむいていた。

「おおさむい。さて、もどらへんか。寝とかんと、明日、もたんからな」

ホクさんにうながされて歩きだした。みんなのヘッドランプの明かりがいつせいに動きだした。

「なんや、どないしたんや、雄太」

「まだ、よくわからない」

ホクさんも長老さんもユイさんも軽く笑った。

「そいつはすごい。わからんことがわかったって、そりゃ、すごいことやぞ。わがろうとする最初の一步がわからんていうことやからな。ぼくらはそれほどまぢがったこと言うてへんつもりや。そっから先は、雄太なりに考えることや。ヒトは考える葦、やからな。エラそうなこと言うたかて、ぼくからもわからんことばっかりや。そんなでいつつももがいとるんやで」

ホクさんが頭をつるりとなでた。

不思議な気分になっていた。

わからないということは、わからない自分がだめなんだと今までは思っていた。それなのに、わからないことがすごいことだとホクさんが言う。これからわかればいいのだからと。

ぼくは考えこんでしまった。

ぼくにはまだまだわからないことが多すぎる。どこからわかっていけばいいのかもわからない。ふとユイさんの一言が頭をよぎった。

「自分が素直に感じたこと。それを大切にしていきたい」

ぼくも、この山はきれいだと素直に感じた。だからみんなの手伝いをする。たいして役に立っていないかもしれないけれど、少しは役に立ちたいと思っている。そして、それがすごく楽しい。

(今はその気持ちを大事にすればいいんだ)

長老さんの言葉も浮かんできた。

(ケガをしている自然の手当なんて、お医者さんみたいでちよつとかっこいい)

音をたてないように用心しながら、寝袋ねぶくろに入った。みんなの話が聞けてよかったと思った。そして、いつものように、スコンと寝入ってしまった。

(にしがきようこ『ぼくたちのP(パラダイス)』より)

※ゆれ動く詩人のぼくは……本文より前の場面で、「星は雲で見えなくてもそこにある」と言う

ユイに対して雄太が「ユイさんって詩人なんですか？」と言う場面がある。

※カミナリを予知できる……カミナリが大の苦手である雄太は、カミナリの前兆を体で感じるこ  
とができる。

※ホクさんが関西弁じゃない……本文より前の場面で、ホクは普段ふだんは標準語で話すが、実家に帰ったときと山にいる時だけは関西弁になるという説明がある。





問4 ——線③「ぼくはもう少しユイさんのそばにいたかった」とありますが、ここに至るまで

の雄太の気持ちの説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 自然を守ることはぜったいに正しいという思いを正面から否定されてくやしい思いをしていたが、ユイの話を聞いているうちに自分の思いがちがいに気づくことができたので、そのことをきちんとユイに伝えておきたいという気持ちになっている。

2 自然を守ることはぜったいに正しいという思いが受け入れられずにふに落ちない思いをかかえていたが、ユイの話をきいているうちにだんだんと考えがまとまっていき、ちがう表現でユイに思いを伝えてみたいという気持ちになっている。

3 自然を守ることはぜったいに正しいという思いに同感してもらえないことにとまどいを感じ、ユイの話を聞いてもなかなか納得できないので、もう少しユイと話をしながら自分の考えを整理してみたいという気持ちになっている。

4 自然を守ることはぜったいに正しいという思いに賛同してもらえないことに強い違和感いわかんをもち、いくらユイの話を聞いてもその理由に納得できなかったので、納得いく説明をもらうまでユイに食らいつこうという気持ちになっている。

問5 ——線④「長老さんがぼくを見る。笑みが顔に広がっていった」とありますが、このときの長老の笑いほどのような気持ちからくる笑いですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 雄太が自然保護のあり方について話をしている姿を見て、自分たちの活動に今までとは違うやりかたが加わっていくはずだと喜ぶ気持ち。

2 雄太が自然保護のあり方について話をしている姿を見て、このことが雄太の自然に対する理解を深めるためのきっかけになると喜ぶ気持ち。

3 雄太が自然保護のあり方について話をしている姿を見て、明日からの作業では雄太がより積極的に行動し、自分は楽ができるはずだと喜ぶ気持ち。

4 雄太が自然保護のあり方について話をしている姿を見て、自分たちの活動は次世代につながったことを確信し、自分は活動から手をひけることを喜ぶ気持ち。



問8 この文章の表現と内容について説明したものととして最もふさわしいもの次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 「頭をかきむしっているユイさん」、「長老さんがあごをなでながら話しはじめた」という表現は、大学生たちが未熟な考えながらも自然保護に興味を持ち始めた雄太に、なんとかして中学生にもわかりやすく話を伝えるために身ぶり手ぶりをまじえておおげさに話している姿が見てとれ、大学生たちの優しさやさしさを象徴的に表す効果をもたらしている。

2 「『星、でてないです』ぼくはすぐに反応した」、「見えないけれどあるんだ」、「今夜の星空みたいにも、今は見えなくても、あるってことはある」という表現は、本文全体を通して今日の前にあるものだけを真実と見る若い雄太の姿と、目に見えるもの以外にも目を向けることのできる大学生の姿を対照的に描く効果をもたらしている。

3 「長老さんが小さな石を、ホクさんの足元にした」、「長老さんはぼくの足元に石をころがした」という表現は、長老が議論に熱くなり興奮する仲間を冷静に見つめなだめながらも、雄太に自然保護の大切さを教えるために話の方向を整理して導いていく重要な役割であることを示す効果をもたらしている。

4 「暗くてユイさんの表情が見えなかった」、「ユイさんのかすれ気味の声が続いた」という表現は、昼間は明るく、ひたすら目的に向かって山の自然保護活動をする大学生たちではあるが、その内面にはおもてには表れない苦勞や悩みなやみがあるということを表し、自然保護の是非せひについて読者に間接的に考えさせる効果をもたらしている。

(問題は次のページに続く)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい

私と小鳥と鈴と　金子みすゞ

私が A をひろげても、  
お空はちつとも飛べないが、  
飛べる小鳥は私のように、  
地面を速くは走れない。

私からだをゆすつても、

B 音は出ないけど、

あの鳴る鈴は私のように、  
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、  
みんなちがつて、みんないい。

問1 この詩の第一連、第二連の表現についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 平易な口語を用いて、誇張的に心情を述べている。
- 2 平易な文語を用いて、客観的に事実を述べている。
- 3 平易な口語を用いて、対比的に事実を述べている。
- 4 平易な文語を用いて、感動的に心情を述べている。

問2 空らん A に入れるのに最もふさわしいことばを、漢字二字で答えなさい。

問3 空らん B に入れるのに最もふさわしいことばを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 きれいな
- 2 かなしい
- 3 ふしぎな
- 4 おおきな



問4 ——線「みんなちがって、みんないい。」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 たとえ価値や能力に優劣があっても、それぞれが自分にふさわしい役割を手にいれることによって、共存していくことが可能になるということ。
- 2 いまはみんなの考えが異なっているも、時間の経過とともにいつか必ずわかりあえるときが訪れて、共存していくことが可能になるということ。
- 3 それぞれにできることやできないことがあるので、互いのよさを認めあい尊重しあうことによって、共存していくことが可能になるということ。
- 4 みんな同じようにはなれないという現実を受けとめ、自分だけの独自の価値観を持つことによって、共存していくことが可能になるということ。

問5 この詩からは、他者への思いやりを感じる事ができますが、次にあげる俳句の中から、同様に他者への思いやりを読み取ることができるものを一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 古池や蛙飛び込む水の音
- 2 やせ蛙負けるな一茶これにあり
- 3 或る時は雨蛙なき雨来る
- 4 菜の花や昼も蛙の鳴く処

4 次の(1)～(5)の A と B には同音異義語が入ります。それぞれの A・B にあてはまることをば漢字で書きなさい。

- (1) 温和な A がみんなに好かれる。  
落ち着いて B な答を導き出す。
- (2) とても A な宝飾品ほうしやくひんの数々が収められている。  
トレーニングの B が徐々に表れ始めた。
- (3) 雨風にさらされ鉄が A してさびてしまう。  
会議が成立するためには会員の三分の二の B が必要だ。
- (4) 今まで作りためてきた作品を展覧会で A する。  
三か月間の長い B を経て港に帰る。
- (5) このカードは一定の A を過ぎると使用ができなくなる。  
裁判所は法をつかさどる B だ。



